

ヘイセイ13ネンドソツギョウロンブンレジュメ

安河内, 智美

<https://doi.org/10.15017/796>

出版情報 : 教育経営学研究紀要. 6, pp.131-133, 2003-01-31. Study Hall of Educational Administration, Graduate School of Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



ティーム・ティーチングによる効果的な授業経営に関する考察 —「基礎・基本」と「生きる力」の形成に焦点をあてて—

安河内 智美
(平成14年3月卒業)

I. 目次

序章	研究の目的と視点
第一章	ティーム・ティーチングの展開
第一節	ティーム・ティーチングの導入期
第二節	ティーム・ティーチング再生期 —第六次公立義務教育諸学校教職員配置改善計画を通して—
第三節	考察
第二章	ティーム・ティーチングの授業経営の要素
第一節	ティーム・ティーチングの展開例
第二節	「基礎・基本」と「生きる力」の位置づけ
第三節	考察
第三章	ティーム・ティーチングの実践事例
第一節	調査の枠組みと方法
第二節	福岡市立壱岐小学校
第三節	古賀市立花鶴小学校
第四節	篠栗町立勢門小学校
第五節	考察
終章	

II. 概要

本論文では、ティーム・ティーチング(以下TTとする)による効果的な授業経営に関して、特に「基礎・基本」と「生きる力」の形成に焦点をあてて以下の手続きによって考察した。

第一に、TTの授業が「基礎・基本」「生きる力」の両者を形成していることを明らかにする。初めに、TTの先行研究を「基礎・基本」「生きる力」の二つの視点において考察する。次に、TTの展開例の分類枠組みを整理した上で、TTの分析枠組みを仮説的に提示する。第二に、3校のTTの実践事例から、「基礎・基本」「生きる力」の両者がどのように形成されているかを、各実践事例の指導案、その他資料、インタビューを通して明らかにした。最後に、各事例から「基礎・基本」「生きる力」の連携が実現されるTTの授業のあり方について考察を加えた。

これまでに、授業改善の方法として実践されてきたTTやその分析方法においては、「基礎・基本」「生きる力」のいずれかに特に焦点が当てられ、両者の関係性に注目されてこなかったという限界があった。そこで本研究においては、「基礎・基本」「生きる力」の関係性について抽出が可能な場面として、TTによる授業場面を設定した。

第一章では、導入期、再生期の各時期におけるTTの展開を、実践事例を含めて概観した。導入期においては、「教師の専門性を発揮する」指導による学習効果が求められており、

特徴として、大グループによる一斉指導型が主であり、学習の効率性が重視される傾向にあった。一方、再生期では「個に応じた多様な教育」の展開に対応することが求められ、小グループや個別指導を取り入れることによって、個に対応しようとする傾向が強くなった点を明らかにした。

第二章では、導入期、再生期におけるT Tの展開例をもとに、授業の目的、ねらい別に適したT T展開モデルについて検討した。また、T Tの授業を見る視点として、「基礎・基本」「生きる力」のそれぞれについて考察し、両者の関係を構図化し、位置づけを行った。

「基礎・基本」「生きる力」の位置づけについては、以下の2点を指摘した。

①「生きる力」は、学力の「基礎・基本」をもとに形成されるような、層的構造のもとに成り立つ。

②学力の「基礎・基本」は、知識・技能といった学力と、自己学習力に関するものによって獲得される。

T Tの展開例については、全体の説明や、オリエンテーション、まとめ等はグループで行われ、グループ化される場合は、能力別や課題、興味・関心別によって編成される点をまとめた。学力の「基礎・基本」を定着させる段階においては、小集団(個別)が効果的であり、「生きる力」に見る、得た知識を活用、応用したり、発表、まとめたりする場面では大グループの編成が用いられることが多い点も指摘した。

第三章では、授業にT Tの方法を取り入れている3校を対象に、第二章で述べた2点に加え、①「生きる力」と「基礎・基本」の両者がどのように形成されているか ②両者の形成にT Tがどのように効果的に機能しているかに注目し、授業経営の様相を描き出した。

その結果、3校の事例を分析することにより、各学校で「基礎・基本」と「生きる力」が有機的に結びついた結果、授業場面において知の連携が図られていることが明らかになった。また、T Tの授業経営方式に関して、3つの事例に共通する点を指摘した。

①コース別T Tがとられている。(習熟度別、興味・関心、課題別)

②子どもたちが活動(作業)する場面が取り入れられている。

③学習過程が3段階に設定されており、基礎的な段階から応用、発展の段階が仕組まれている。

壱岐小学校の事例は、算数における習熟度別編成である。学年全体を3つの習熟度別に分け、各コースのレベルで基礎・基本の定着を図り、応用、発展に繋げることが目指された。授業後の結果から、子どもたちが算数を理解したこと、自力解決力が身に付いたという点から、「基礎・基本」と「生きる力」の形成が見られたことを明らかにした。花鶴小学校の事例は算数であり、授業中の問題解決の場面において、子どもたちが自ら選ぶコースが設定されている。子どもたちが算数を理解すると共に、算数の楽しさを学び、それを表現する力、更に学ぼうとする意欲が見られたという結果から、「基礎・基本」と「生きる力」の形成が見られたことを明らかにした。勢門小学校の事例は、外国の人達との交流による総合的な学習の時間である。学年を興味・関心別コースに分け、学習集団が編成されている。その結果、子どもたちは、外国の人達と交流したという体験によって学習意欲を高め、発見や感動を自分なりに表現する力をつけることができた。よって、「生きる力」に含まれる資質、能力の形成が見られ、それを支える学力の「基礎・基本」の形成も見られたことを示した。

3つの事例からは、「基礎・基本」と「生きる力」の構図に見る層的構造の関係によって、両者が形成されていることが明らかになった。

以上のことから本論文では、実践事例を通して、以下の点を明らかにした。

- ①「基礎・基本」「生きる力」は、層的構造の関係にあるといえる。
- ②「基礎・基本」には、知識、技能という学力の面と、「生きる力」に相当する資質、能力の面がある。
- ③「基礎・基本」「生きる力」の関連性がT Tの授業において見られた。
- ④③のような授業を可能にする授業経営においてはT Tの導入が効果的である。

今後は他学年、他教科においても調査を行い、授業経営に関する研究を深めていくことが課題である。

【参考文献】

- ・安彦忠彦「基礎・基本と学力」『教職研修総合特集 子どもの学力読本』教育開発研究所，2001。
- ・大野蓮太郎・北条小学校共著『実践ティーム・ティーチング』明治図書，1966。
- ・九州個性化教育研究会(加藤幸次監修)『ティーム・ティーチングの計画・実践・評価』黎明書房 1995。
- ・下村哲夫「日本型ティーム・ティーチングの問題点」児童研究会編『児童心理』金子書房，1995年6月，106-111頁。
- ・高階玲治「ティームティーチングと組織文化の改善」『学校経営』第一法規，1993年6月，71-89頁。
- ・高浦勝義(代表)平成8-10年度科学研究費補助金(基盤研究A)研究成果報告書『ティーム・ティーチングによる指導の効果に関する研究(第一次報告書)ーティーム・ティーチングの実施状況に関する調査結果一』1997年。
- ・田村哲夫『「生きる力」教育は基礎基本の充実から』『学校運営研究』2001年8月，20頁。
- ・森部英生『「一学級当たりの定数」どう論議されてきたか』『学校運営研究』明治図書，1993年1月，75-79頁。